

南三陸ノート（2）

杉田 孝夫

1. 震災から3年目 2013-2014
2. 震災後最初の町長選挙
3. 震災後最初の町議会議員選挙
4. 仮設住宅
5. 付録：茨城・福島沿岸被災地復旧状況視察

1. 震災から3年目 2013-2014

2011年3月11日の震災からこの3月でまる3年が経過した。2012年9月に調査を開始してから、2013年2月、2013年8月、2014年1月とほぼ半年ごとに南三陸調査を続けてきた。訪れるたびに少しずつ風景が変化している。

八幡川上流の小森地区の三陸縦貫自動車道志津川インター予定地ではインターチェンジの工事が急ピッチで進んでいる。小森地区は海岸から2Km奥にあるが、八幡川に沿ってここまで津波が遡上してきた。さんさん商店街からこの小森までの国道398号線沿いには、さんさん商店街が出来た後、コンビニ、ガソリンスタンド、さらにホームセンターとつぎつぎに新しい店舗が立ち並ぶようになった。復興の兆しともいえるが、町の再建計画がまだ確定していない段階だっただけに、嵩上げ予定地の外とはいえ、復旧計画が定まらないうちに、こんなに建物が建ち始めて大丈夫なのだろうか、なにか違和感のようなものを感じた。志津川インターは平成27年度供用予定ということであるから、来年には、仙台から高速道路で志津川まで1時間余りで来れるようになる。そのときどれだけそれに対応できる条件が整っているだろうか。

柳津・気仙沼間のJR気仙沼線は依然運休中だが、2012年5月7日、JR東日本が提示した気仙沼線のBRT（バス高速輸送システム）方式による仮復旧に、

沿線自治体が合意し、同年8月20日からバス代行運転が暫定運行を開始し、12月22日からは本格的な運行を開始した。志津川にもさんさん商店街の隣に駅ができた。

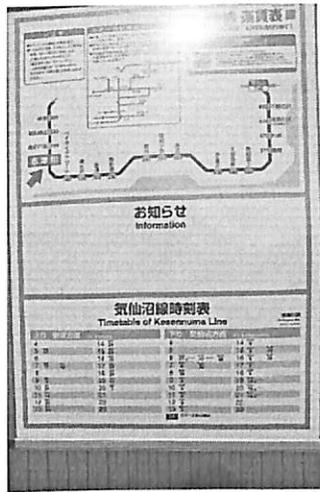


BRT志津川駅 奥がさんさん商店街 2013年2月15日

本数は1時間に一本、朝夕2本といったところ。地元ではせめて線路が大丈夫な柳井津から戸倉までBTRではなくディーゼル列車を通してほしいのだがという声も聞いた。BTRが運行し始めて、従来よりは多少足の便がよくなったようには思うが、いずれにしても、自家用車がなければ、ほとんど何もできないのが現状である。

2013年8月に南三陸町内の漁港23港すべてを見て回った。（県管理の志津川、波伝谷、伊里前、泊の4漁港のほかに、町管理の19漁港が浜ごとにある）。

写真は町管理の漁港の一つのばなな漁港の物揚げ場の工事風景である。地名にばななという名称は妙



JR気仙沼BRT路線図と時刻表 2013年2月15日

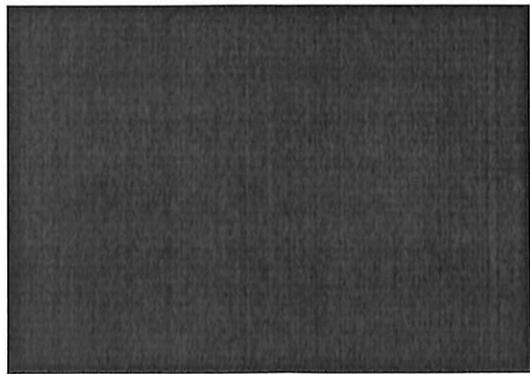
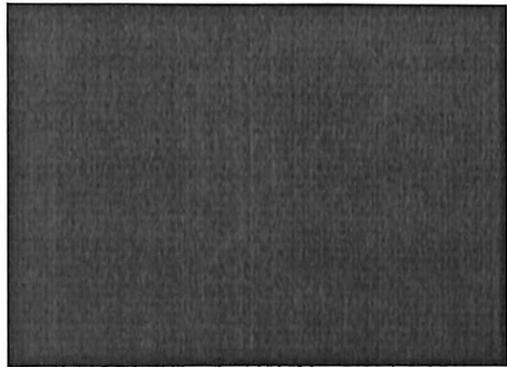


ばなな漁港 2013年8月3日

な感じだが、これは馬場、名足、中山の三地区の名称の頭をとって名付けたものである。写真のような具合に、どの浜も復旧工事の真っ最中である。水揚げはすでに震災前の8割程度にまで戻っているようであり、加工場などの施設が復旧すれば、少なくとも水揚げ量は旧に復すであろうことが予測できるところまで来ている。しかしもっと大きい港である志津川漁港の港湾施設および漁業・加工業施設の整備が、市街地の嵩上げ工事、商業区域、工業区域の基盤整備と連動しているため、復旧までにまだ数年を要するであろう。ちなみに2013年はとくにアワビが豊漁だったそうだ。カキやホタテの育ちもよいそうだ。津波で海底のヘドロが洗われ、水質が良くなったことによる思いがけない効果だという。

2013年2月に訪れたときは、がれきの山と処理場の間をトラックが頻繁に往復していた。また遠く

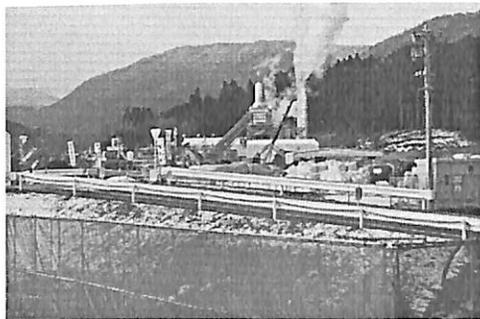
から焼却炉から上がる白い煙を目にすることができた。2012年9月から廃棄物の仮置き場への搬入が始まり、同年12月から焼却炉が稼働を開始した。南三陸地区では南三陸町戸倉、気仙沼市本吉町小泉に二カ所処理場がつくられた。2013年8月に訪れたときは、志津川の旧市街地のあちこちに積まれていたがれきの山はほとんどなくなっていたが、小泉処理場にはまだ大型トラックが出入りしていた。宮城県内の災害廃棄物の焼却処理が完了し、最後の稼働施設となっていた石巻市潮見の仮設焼却炉が火納め式をおこなったのは、2014年1月18日だった。



寄木の入江を望む 2014年1月19日



がれきの片付けが進む 2013年2月15日
南三陸町志津川汐見



南三陸災害廃棄物処理場
南三陸町戸倉水戸部 2013年2月17日

今回訪れた時には、志津川の旧市街地からはがれきの山はすっかりなくなっており、防災センターの鉄骨だけが平地にそびえているような感じであった。それに代わって高上げ予定地にあたらしい盛り土が出来始めていた。これは高台移転予定地の山を切り崩し造成し、そこで生じた土を高上げ予定地に回すという作業がいよいよ始まったことを意味する。高台移転の造成が完了して、仮設住宅からの移転も可能となる。高台移転の候補地は2012年夏にはほぼ

固まり、早い所は2013年の始めから工事が始まり、現在も進行中である。高台移転の場所の造成がすべて完了し、実際に家が建てられ、仮設住宅からの引っ越しが始まるまでにはまだ2、3年かかりそうである。また高上げ予定地の造成が成ってはじめて、新しい町の土台ができるわけだが、それも今始まったばかりである。

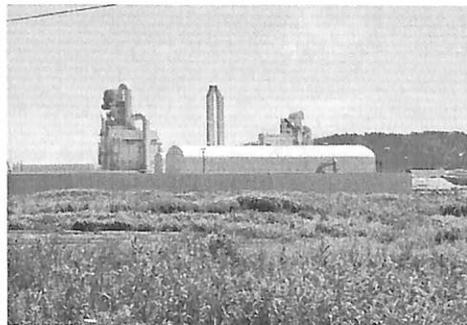


寄木地区高台移転地の造成工事2013年8月2日

しかしともかく町の再建のための基本設計図は合意が得られ、基幹道路等を中心とするインフラの再設計画も実施に向けて動き出している。この間、2013年10月に町議会議員選挙と町長選挙が行われた。町長は再選を果たし、町議会の構成もほぼ従前通りであった。現町長が指揮してきた震災対策と復興計画が有権者に信任されたことを意味する選挙であった。

2. 震災後最初の町長選挙

南三陸町は、2005年（平成17年）10月1日に、旧志津川町と旧歌津町の対等合併により発足した。



災害廃棄物処理業務気仙沼ブロック（南三陸処理区）気仙沼市本吉町小泉 2013年8月2日

	有権者総数	投票総数	投票率	当選者得票数	次点
2005年	15,263人	12,363人	81.00%	佐藤仁 9,246	さとうみわ 2,921
2009年	14,658人	12,012人	81.95%	佐藤仁 6,537	佐藤もんや 5,359
2013年	12,300人	9,609人	78.12%	佐藤仁 5,308	小野寺寛 4,221

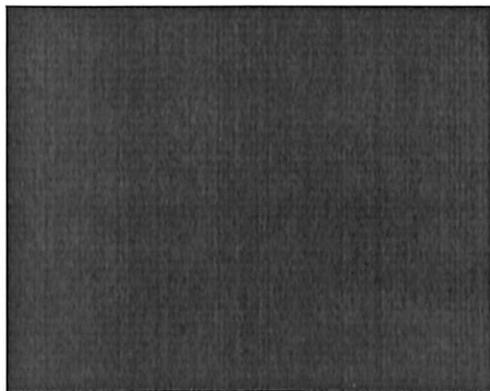
そのときの町長職務執行者は牧野俊・前歌津町長であった。南三陸町発足後、町長選挙・町議会議員選挙はこれまで3回行われている。まず合併直後の2005年（平成17年）11月6日の選挙、これは合併後最初の選挙であった。このとき前志津川町議会議員の佐藤仁氏が総投票数12,363票のうち9,246票を獲得し、初代南三陸町長に就任した。対抗馬のさとうみわ氏は2,921票であり、佐藤仁氏の圧勝であった。投票率は81%であった。

第二回目の選挙は2009年（平成21年）10月25日に行われた。投票率82%で、佐藤仁氏が6,537票を獲得し、再選された。このときの対抗馬は佐藤もんや氏で5,359票であった。佐藤仁氏は、2005年のときと比べると、おおきく得票を減らしている。その一年半後2011年3月11日に東日本大震災が発生する。今回の選挙はそれから2年半後に行われた。このたびの選挙結果はこの2年半の復旧と復興をめざしておこなってきた町政に対する住民の評価と審判である。結果は佐藤仁氏が5,308票を獲得して三選を果たした。得票差が2009年には1,168票、2013年選挙では1,087票であった。佐藤仁氏の得票率は、2009年には54%だったが、2013年には55%である。有権者総数が2,358人減少し、投票率が3.8%落ちているなかで、2005年、2009年、2013年の3回の選挙での佐藤仁氏の得票率の推移をどう読むかは難しいが、町民が町政に対して復旧事業と復興計画に一定の評価と支持を示したことは確かである。2005年選挙は合併の祝祭気分と期待感を示している。2009年選挙結果はそうした気分が落ち着き、むしろ合併が期待したほどの効果を生んでいないのではないかという気分の表れとも読むことができる。2013年の選挙結果は、そうした気分を引きずりながらも、震災後の町政の復旧復興に向けた努

力に対する一定の肯定的評価が示されたと読むことができる。合併前から緩やかに続いている人口減少と震災による人口減少を考慮すれば、この得票数は重い意味をもっていると見ることができる。

3. 震災後最初の町議会議員選挙

震災後最初の町議会選挙も町長選挙と同日2013年10月17日に行われた。投票率78.10%で、町長選挙の投票率とほぼ同率である。前2回の選挙でもほぼ同率であった。2005年町議会議員選挙では定数22であったが、2009年から定数16になった。合併前からの定数および地区ごとの議員の数を後藤清喜氏に伺った。後藤氏は20年前に初当選し、今回で7選。2009年から2012年までは議長を務め、震災時から震災後の議会運営の責任を担った。



戸倉の津ノ宮漁港を基地にでサケの養殖業を行っている。合併前の議員定数は志津川町議会18、歌津町議会16だった。志津川町議会の定数18の地域別議員数の比は、戸倉：志津川：入谷＝2：1：1といったところで、漁業の戸倉、商工業の志津川、農業の入谷といった感じであったという。戸倉が9人前後、志津川と入谷が4人ないし5人といったところだったようだ。2005年（平成17年）の合併で、

新しい南三陸町議会の定数は22となった。合併前は二議会で24の定数があったわけだから、2議席減ったことになる。さらに2009年選挙から定数は16になった。ここで一挙に定数が6減ることになる。合併後の地区別議席数を表にすると次のようになる。

	戸倉	志津川	入谷	歌津	計
2005年	5	6	5	6	22
2009年	4	4	4	4	16
2013年	5	2	4	5	16

2005年合併後の選挙で歌津出身議員は合併前の16名から6名に減っている。10名の減少である。それに対して、志津川3地区出身の議員の合計は合併前の18名から16人に減ったが、2名の減少にすぎない。2009年選挙では、6名の定数削減のなかで、各地区4名ずつの当選者だった。合併後の町が4つの地域から構成されているという考えに立てば、一見きわめて公平かつわかりやすい結果のように見える。減少数は、戸倉1、志津川2、入谷1、歌津2である。

歌津地区は合併前の旧町議会では議員が16名であったのに、合併後の新町議会では2009年にはわずか4名であり、12議席を失った計算になる。それに対して志津川3地区は計18から12への減で、6議席失っただけであり、かつ地区別にみれば、戸倉が半数になった他は志津川、入谷ともせいぜい1議席の減に留まっている。合併後に選挙のたびに言われたという「合併などしなければよかった」という声の裏側には、この選挙結果があるように見えてくる。そして過去三回の町長選挙の結果がそれを証明しているようにも見える。

2005年町長選挙は、佐藤仁氏の圧勝であった。しかし同時に行われた町会議員選挙では、歌津出身者は6名だけであった。2009年の町長選挙で2005年選挙のときよりも2,709票も得票を減らすことになったのは、新議会の構成における歌津出身者の数が想定したよりも少なかったことに対する失望の大きさに原因があるのではないだろうか。定数がさらに16に削減されて行われた2009年の選挙では、歌

津出身議員は2名減り4名になってしまった。人口比を考えれば当然の結果であるといえるが、かつて独立した町であった歌津出身議員および歌津地区の住民の旧志津川町3地区に対する複雑な感情が垣間見えてくる。2013年町長選挙での佐藤仁氏の得票数は2009年選挙のときよりも1,229票少なく、2005年のときよりも3,938票少ない。それでも佐藤氏は投票総数の55%の支持を得て三選を果たした。これまでの8年間の町政に対するさまざまな思いを町民はそれぞれ抱きつつ、震災後の復旧復興については、いまは佐藤氏に町政を託すしかないという判断をしめたのであろう。

この町民の気分は、議会選挙にも表れている。今回の選挙では現職12人、新人5人、元職1人の計18人が立候補した。結果は元職1名(72歳)と現職1名(57歳)が落選した。新人5人は全員当選した。新人5人のうち3人は60歳以上であり、1人が55歳、1人が34歳であった。現職はすべて59歳以上である。当選者の11人が59歳から64歳の間である。新人に対する期待と60代前半の団塊の世代に復旧復興を託すしかない現状を反映している。

もう1つ今回の選挙で注目すべき点は、志津川地区を地盤とする議員が2名に減ったことである。商業中心の志津川地区が震災で壊滅的な打撃を被り、住民の多くが仮設住宅その他に分散し、かつてのコミュニティやネットワークの崩壊が著しく、その立て直しがまだできていないことを示している。

人口減少と少子高齢化の中で、この町では、団塊の世代がこれからの本格的復旧と復興を担っていかなければならない。そのことをはっきりと示した選挙であった。漁業と農業と自営業および公務員が大半を占めるこの町では、生涯現役という新しいライフスタイルを確立することが、この難局を乗り越えて行く条件のように見える。この事実から目を背けることはできない。この事実は、町長や議会に対してのみ向けられるべきものではなく、実は町民自身が自分のこととして直視し、乗り越えるべき課題なのだとも言える。

ところで同じ漁業中心の戸倉と歌津でもやはり地

域的な個性があるという。戸倉は「がんばる漁業」にまともって参加したが、歌津は個人経営なようだ。

歌津のほうが一軒あたりの生産高・水揚額が大きいからだともいう。また歌津の場合浜ごとの集落の契約講が今もなお意思決定などに機能しているからだともいう。それに対して戸倉はそれほどには強くないという印象のようである。

漁師は基本的に個人経営のなところがあるが、歌津は外洋性で漁師も気がつよいが、戸倉は内湾性で漁師も気がやさしいのではないかという比較は面白かった。

震災のあと人びとがバラバラになり、選挙がやりにくくなったという印象が議員たちにはあるようだ。すでに震災前から地域コミュニティが弱くなってきており、震災後その傾向はいっそう進み、そのなかで地域の結束が相対的に強い地区と形骸化してきている地域に分かれるようだ。前者は漁業中心の住民の変動が小さい地区であり、後者は漁業や農林業以外の従事者で新しく住み着いた人の割合が多い地域である。同じ戸倉でも津宮などは前者、折立は後者の典型だという。

有権者はいま不安な気持ちを抱きつつ、選挙を行った。おそらくわが身、わが家族、わが町、わが集落のことを考えつつ、投票したに違いない。震災以前の選挙行動とは違って、より切実に自分たちの町の過去と現在と未来を考えながら投票したに違いない。公と私の境界線上にわが身を置いてこれまでにないほどに両方を考えながら投票したにちがいない。その意味で地域共同体の中に生きる一人の「市民」として投票をしたといえる。しかしそれでも住民は支持する議員に対してなお町全体のことよりも居住する地域にまず目を向けてほしいと思っていることも否定できないようである。一人一人の有権者の意識にある種の分裂を見ることができ、それだけ有権者の意識には切実な思いが込められているとも言える。今回の選挙で選ばれた議員も町長もその票の重さを背負ってこれから4年の任期を務めることを課されている。

4. 仮設住宅

2013年10月20日現在で、南三陸町の仮設住宅戸数合計は2062、入居世帯合計1818世帯、入居人数合計5385人である。団地は町内に52カ所、町外の登米市に6カ所ある。登米市の6団地には、戸数450戸、402世帯、1,005人が住んでいる。もっとも規模の大きい歌津平成の森団地には戸数236戸、187世帯、506人が住んでいる。2014年1月18日平成の森団地を訪ね、自治会長の畠山扶美夫氏に震災直後から現在までの団地の様子を伺った。高台にある平成の森には、キャンプ場、野球場、体育館、宿泊施設などがあり、隣接して町役場支所、デイケアセンターがある。サッカー場と駐車場とテニスコートがあったところに仮設住宅が建てられている。2011年3月11日、周辺から400人が避難してきた。そのうち地元の人は250人、帰宅困難者150人だった。人数が把握できたのは、安否確認用のメモを書いてもらったからだという。その日の夜は、気仙沼方面の空が真っ赤になっており、余震のなか不安で、休んでいられなかったという。3日間孤立状態だったが、統制がとれなくなるといけないので、2日目に町議会副会長の及川ひとし議員にリーダーになってもらい、3日目には自治会を組織することにした。会長に及川議員、副会長には各集落の長5人になってもらい、畠山さんが事務局長になり、一週間目には自治会が組織として確立した。サッカー場に石灰でSOSを書いたら、4日目の朝に米軍のヘリがやって来た。そのあと次々にヘリがやってきては毛布、水、缶詰などを運んでくれた。一週間後には国道45号線もなんとか通れるようになった。避難者を水汲み班3班、着替えの配付役の衛生班（女性4名）、炊事班（女性）4グループを結成したほか、歌津中学校に設置された避難所本部から物資を運ぶ物資調達班、さらに警備1名、監視1名を組織し、毎日ミーティングおこなって、2ヶ月半の避難所生活を乗り切った。5月中旬には電気、水道が復旧し、6月1日からは仮設住宅への入居を始め、7月31日に

避難所の閉所式をした。

その間、医療については、4月始めに横浜済生会病院の医師3名と看護師のチームがワゴン車2台でやって来て、アリーナの一室に診療所を設置し、5月中旬まで活動した。震災から2週間目に歌津出身の鳴子温泉のホテル経営者が二日にわけて迎えに来てくれて、ようやく風呂に入ることができ、4月中旬には全日空がCSRとしてボイラー車2台を選び風呂を設置してくれた。

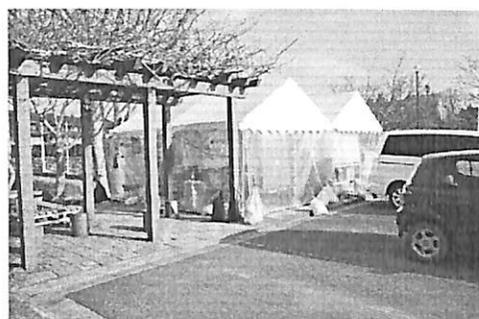
鶴岡の全社協傘下のボランティアグループ「チームはちまき」が4月から6月まで使い捨てのプレートやカップを人数分運んでくれたこと、それに250人分のシーツ500枚を用意し、250枚を一週間ごとにクリーニングして交換してくれたことなど、多くのボランティアの支援によって支えられたことを語ってくれた。

仮設住宅への引っ越しに際しては棟割りだけは集落ごとにするのを認めてもらったことが、入居者のその後の精神的安定の基礎になっていると語った。2014年1月18日現在167世帯499人が暮らし、218戸中203戸使用している。少しずつ退去する人が出ていることが分かる。現在65歳以上が160名、77歳以上が76名、今年成人した人11名（昨年は7名）で、全員が成人式に帰ってきたという。2013年4月に入学した小学1年生は2名、2014年は1名なそうだ。

震災から2年10ヶ月経過し、折り返し点かなという印象だという。高台移転造成工事は平成26年度中に完了しそれから住宅建設が始まる。規模の大



デイケアセンター（歌津老人福祉センター）入り口
2014年1月18日



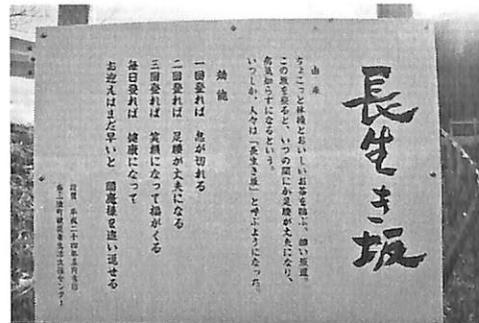
カフェあずま〜れ（あずま〜れは「集まれ」の意）デイケアセンターのすぐ前にあり、手前坂下に仮設住宅がある
2014年1月18日



カフェあずま〜れの旗 2014年1月18日



デイケアセンター（歌津老人福祉センター）
2014年1月18日



仮設住宅からカフェあずま〜れ、デイケアセンターへ
向かう途中の「長生き坂」の看板 2014年1月18日

きい増沢地区や伊里前地区は造成に2年かかり平成27年度いっぱいかかるようで、住宅建設は平成28年度になる。他の小規模な移転先は27年度には家を建てることのできるだろうということである。それにしても高齢者は公営住宅に入るか家を建てるか迷うところだとも語った。

こうした状況は、大規模な高台移転地の造成工事を進めている志津川地区でも同様のようである。

本報告では、第2回調査（2013年2月11日～2月14日）、第3回調査（2014年7月31日～8月4日）、第4回調査（2014年1月17日～1月19日）をもとに、震災から3年目の1年間の変化と現状を記した。第4回調査のあと2014年2月8日から2月11日にかけて銚子から茨城・福島第二原子力発電所近くまで沿岸被災地を視察する機会を得たので、南三陸の被害状況・復旧状況と比較する意味で、以下に視察の記録を付録として記す。

5. 付録：茨城・福島沿岸被災地復旧状況視察

2月8日（土）雪が舞う中、土浦からレンタカーで銚子・鹿島・大洗、2月9日、大津・那珂湊・阿字ヶ浦・東海村・高萩・磯原・勿来、2月10日、小名浜・豊間・薄磯・四倉・広野・楢葉・富岡・福島第二原子力発電所の付近まで車で見て回り、11日、国道6号線を那珂湊まで南下し、水戸を経由して土浦に戻った。

2011年3月11日、銚子では死者も行方不明者も発生しなかったが、3mから4m近い津波があり、漁港近くの水産関連施設に大きな被害を受けた。建物の全壊29、大規模半壊24、半壊121、町の中は浸水被害のほかに各地で液状化による被害を受けたのが特徴である。液状化の被害は、千葉県・茨城県の利根川流域や霞ヶ浦周辺にも広がっている。利根川対岸の神栖市では死者行方不明者は0人、全壊0、半壊14、床上浸水3棟と、浸水被害も少なかった。それに比して、隣の旭市の平松、中谷里地区では5mから6mの津波が襲っている。死者14名行方不明2名、住宅の全壊336、大規模半壊434、半壊

511であり、旭市の被害の大きさが目立つ。地震の被害は同程度だが、旭市の津波の被害の大きさが目につく。

鹿島港の津波の高さは、気象庁設置の観測器が流されたためデータは不明ということであるが、茨城県内のもう一つの観測所である大洗では4.2mを観測している。大洗磯前神社入り口の大洗鳥居下より下の低い地域、旧道より下の海岸沿い一帯が浸水し、特に港湾地区を中心にかなりの浸水被害を受けている。宿の主人によれば、神社前のあたりは大丈夫だったが神社前より低い所はやられたということである。この日（8日）は夜から吹雪になり、海は低気圧で大荒れだった。低気圧による高波が津波のように怖いということが、目の前の荒れ狂ったような大波を見ているとよくわかる。

翌朝、大洗から磯原に向かう。まず那珂湊漁港に寄る。漁港の市場でも大人の胸の高さくらいまで、浸水したことが、壁に刻まれたキズ跡で分かる。



那珂湊おさかな市場 2014年2月9日

市場内の海産物店の人にここまで水が上がったと示してくれた。茨城県の沿岸地域は最大4mない



大津漁港と五浦 2014年2月11日

し5m程度の津波が押し寄せたと推測できる。(ちなみに日本原子力発電東海第2原発取水口付近では、到達した津波は最大5.4mであったが、2010年9月に完成した高さ6.1mの防護壁が津波を防いだ。以前の防護壁は高さ4.9mであった。『東日本大震災検証3.11』茨城新聞社、2013年参照)

いまでは海沿いの地域はどこも新しい家々が立ち、遠目にはうっかりすると被災地とはみえないが、近くに行って、地面をよく見るとあちこちにコンクリートの土台だけ残っているのに気がつく。またところどころに朽ち果てた建物が撤去されずに残っている。建て替えるほどの被害をうけなかった古い家や、部分的に修理した家に混じって、新しい家が立っている。茨城県では平磯、阿字ヶ浦、県北部の五浦海岸の岬の右側にある大津港など漁港の被害が大きい。

この日磯原に宿を取っていたが、北茨城地域一帯が前夜の雪で夜半から停電になり、午後になっても復旧できず、宿は十分なサービスが提供できないということで、いわき市内の宿を紹介してもらい勿来を通して湯本に向かった。途中、停電のため、信号も機能停止状態になっている。気をつけて運転しないと危ない。途中の食堂もコンビニも休業状態で昼食もとらないまま勿来を過ぎ福島県に入った。福島県には行ってやっと信号の明かりを確認でき、福島県は停電になっていないことが分かった。茨城県の電力供給は東京電力であり、福島県は東北電力である。

翌日10日、まずは、小名浜港を訪ねた。埠頭で話しをしていた地元の人に震災直後と最近の様子を



いわき市豊間平豊間 2014年2月9日

聞いた。港は60cm地盤沈下したという。また市場の一階部分がすっかり水につかったという。新しい市場を南側につくり、今ある市場の脇に冷蔵倉庫を作る工事をいま行っているとのこと。土の山は地面を掘った土だという。港は大型の漁船もたくさん停泊しており、復旧しているようにみえるが、と尋ねると、試験操業中であり、魚はほとんど水揚げされていないとのこと。建物も立ち、あるいは修復し、もとに戻ったかのように見えるが、見えない部分で復旧できずにいるところが多数あり、また人の生活も同様であるとのことだ。北茨城の大津の港も沈下し、大型船が埠頭につけられないので、小名浜に係留しているという。茨城・福島・宮城、岩手の沿岸すべてに60cm程度の地盤沈下が生じたということになる。いわきでは、とくに北部の沿岸、豊間、四倉の被害がひどかったと聞いたので、豊間、四倉を見て、それから国道6号線を原発近くまで行くことにした。

豊間に入るとこれまでとは違った光景を目にした。



いわき市豊間薄磯 2014年2月9日

小名浜より少し北にある平豊間（ひらとよま）や薄磯（うすいそ）の集落は壊滅的な姿をいまだに残している。三陸の海沿いの壊滅的な被害を受けた戸倉、志津川、清水浜、歌津・伊里前と同じ惨状である。豊間には塩屋埼灯台で有名な塩屋埼がある。



薄磯の海岸と塩屋埼灯台 2014年2月10日

その北側にある薄磯海岸沿いの薄磯地区は見渡す限りコンクリートの土台だけである。

そのあいだに豊間中学校の校舎がポツンと取り残されている。これもいずれ解体撤去されるのだろうが、周辺のがれきの撤去もまだ終わっていない。ショベルカーやクレーン車のがれきの撤去作業中である。このあたりはいわき市内でもとくに被害の程度がひどかったところだというのが、復旧作業の進捗状況も宮城県北部の町村と比べると幾分遅れているように見える。ここでも丘の上にある薄磯神社は大丈夫だったようだ。やはり古くからある神社は津波から安全なところにある。古い神社や寺ほど経験知が生きていることを実証している

新しく平地にできた神社や寺は、今回の津波には耐えられなかった。数百年以上の歴史をもつ神社や寺の存在には学ぶべきことが多々ある。その神社の裏手のほう、海岸よりいくらか内陸部に災害公営住宅の造成と建築が行われている。

そこを通過して四倉に向かう。途中の新舞子浜海岸沿いに、きれいな松林が続く。四倉に入ると、かなり海からはなれているのに、土台だけのところが目につく。立っている建物はみな最近できたもののように見える。かなり広範囲に被害を受けたようだ、新しい建物が建っているが、その間にコンクリート

の土台だけのところがあちこちに認められる。

常磐自動車道の広野から常磐富岡までは閉鎖中、JR常磐線も広野から原ノ町までは運休中であり、国道6号線だけが通行可能であり、富岡からは通行許可書がなければ、その先へは入れない状態にある。今回は検問所まで行って引き返した。警察官ががちりガードしていた。写真を撮ってもよいかと尋ねたら、ダメという返事であった。植葉に入ってから、道路沿いのガソリンスタンドも店も広野寄りの一軒を除いて営業していない様子であった。家々は閉じられたままの様子であり、なかには震災直後から空き家になっているとおぼしき家々もあった。

大洗の宿では、料理はすべて地元のものを使っていますという女将の説明だった。しかしいわき湯本の宿では、地元で採れたものは食材に使っていないという説明だった。茨城と福島ではこうも違うのかとショックを受けた。

福島版のニュースでは毎日、震災関連のニュースが流れている。福島県は放射性物質の処理場を双葉・大熊の二町に限定し、植葉は除外する方針を固め、環境庁に計画の変更を求めるようだ。また福島県はドイツのヴェストファーレン州と代替クリーンエネルギー開発の協定を結んだとの報道が滞在中であった。福島も宮城も震災によるダメージを日々心に刻み、震災と復旧復興をめざした作業をすすめている。東京は日々震災の記憶が遠くなっている。東京と福島の震災に対する記憶の深さの違いを改めて感じた。

地方の自立は、東京に振り回されるようなものであってはならない。そのためには東京に迎合したり、人口減少をただなげいているだけではだめだ。人口減少の利を生かす知恵も必要だろう。あせらずゆっくり独自の再生の道を歩むことによって、新たな地方の自立の可能性が開かれるはずだ。そうでなければ、大量の人口減少時代を迎える東京の論理にただ飲み込まれるだけだろう。